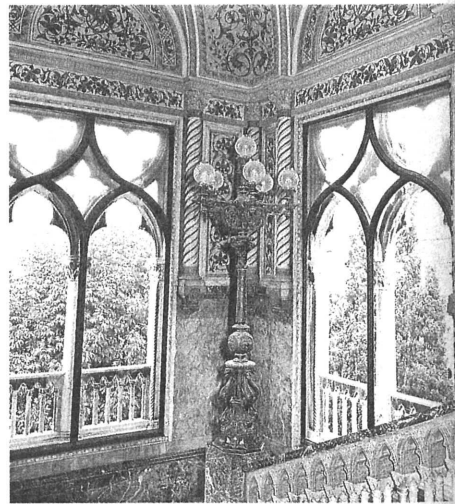


98

サリッザーダ・サン・モイゼの建物, G. フィン, 1853年 Edificio in Salizzada S. Moisè

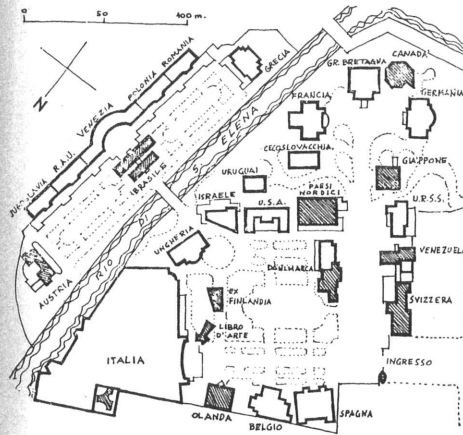
おそらく19世紀の中頃に建てられたこの商業建築は、近代建築を形成する構成要素に数えられるネオ・ゴシックの傾向の、ヴェネツィアにおける興味深い例である(29参照)。事実ここでは、角にトールスをもつ低くさげられたアーチの輪郭部と、構造表現の中にゴシックの様式的な模倣を見出すことができる。しかしガラス窓の多いファサードは、昔のヴェネト・ビザンチン様式のリズムと関連があり、奇妙なことにシカゴ派のいくつかの建物を思い出させる。アーチとバルコニーの鑄鉄の装飾も、室内の階段同様、すでにアール・ヌーヴォーの香りを漂わせている。最もヴェネツィアらしいのは、1階の一連のアーチと非対称にあげられている好ましい小さなソットポルティコ(通路)である。



99

バラッツォ・カヴァッリ・フランケッティ, C. ポイト, G. マネッティ, 1878-80年 Palazzo Cavalli Franchetti

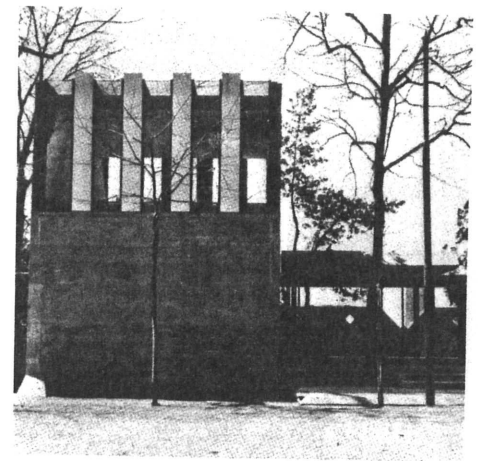
アカデミア橋のたもとにあるサン・ヴィダル広場にあるバラッツォ・カヴァッリ・フランケッティは、大運河沿いのもっとも重要で洗練された後期ゴシック(15世紀)の建物で、1878年から1889年にかけて建築家カミッロ・ポイトと技師ジローラモ・マネッティによって大運河に面するファサードだけ多少原形を残し完全に改造された。中でも庭に面する側面の大階段はすっかり作り直された。この大階段は立体的な構造で、三方を大きなガラス窓で囲まれ、非常に舞台装置的な効果をもっているバラッツォ・ジョヴァネッリ(29参照)の大階段とともに、ヴェネツィアでもっとも人目を引くネオ・ゴシックの内部空間で、この時代のもっとも有名な芸術家や職人によって素晴らしい装飾が施され、19世紀芸術の記念碑となっている。



近代建築

ヴェネツィアは、戦後に、イタリアで最も名声のある建築スクールの一つがここにでき、今世紀の3人の偉大な建築家、フランク・ロイド・ライト、ル・コルビュジエ、ルイス・カーンがこの街のために示唆に富むプロジェクトを提示したにもかかわらず、近代建築にはあまり恵まれていない。ビエンナーレ展会場のいくつかのパビリオン(次ページの写真参照)の建築に、より成功した例をみることができる。ヴェネツィアの現代建築家の中でただひとり、修復やいくつかの建物内部の改造において、独特の足跡を残すことに成功しているのが、カルロ・スカルパである。その作風は、サン・マルコ広場のオリヴェッティのショールーム(1957年-58年)やクエリーニ・スタンバリア財団の1階(1961年-63年)に見ることができる。

80年代には、住宅建築の分野で新しい重要な展開があり、ヴェネツィア市の委託でイタリアを代表する3人の建築家、ジャンカルロ・デ・カルロ、ヴィットリオ・グレゴッティ、ジーノ・ヴァッレが庶民用集合住宅を、ブラーノ島のマッゾルボ、カンナレージョ地区のサン・ジオーヴェ、ジュデッカ島など歴史的街区や入江の周辺部の様々な場所に表現した。(巻末の写真参照) デ・カルロ、グレゴッティ、ヴァッレはともにヴェネツィア建築大学の教授で、この大学の創設者のうちの二人、スカルパとエグレ・トリンカナートの教えを、この様な方法で進展させた。特にトリンカナート女史は、ヴェネツィアの芸術文化の中でもっとも示唆に富む小住宅についての研究の先駆者である。大学はこのように市の公共事業に協力を始めたが、このことはヴェネツィアの未来にとって吉兆である。



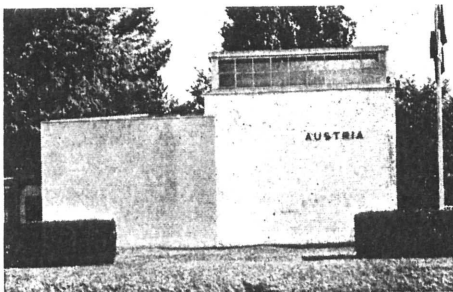
a) ヴェネズエラ館 C. スカルパ, 1954年

100

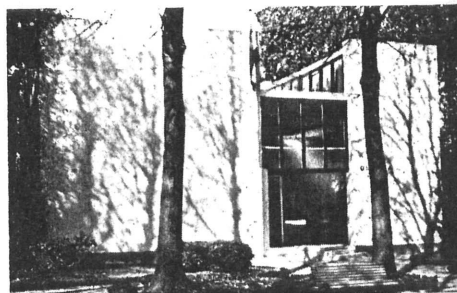
ビエンナーレ会場のパビリオン Padiglioni della Biennale

最初の現代美術国際展は1895年に開始され、広い公園に数多くの建設年代と作者の異なる各国の展示パビリオンが集まっている。これらのパビリオンの多くは、ホフマン、リートフェルト、アールトなど建築家の名前をあげるだけでもわかるように、建築的にも大変興味深い。ここでは、理想的な環境の中で、一つの目的のために建てられた幅広い種類の現代建築の価値ある事例の全体を見ることができる。ビエンナーレの会場全体が公園の中に孤立し完全に独立してヴェネツィアの特徴は特に感じられないし、都市組織と結びついていないことを観察するのは適切である。ラグーナの景観を大切にしている建築は少数だけである。1969年にヴェネツィアでルイス・カーンによって発表された会議場とイタリア館の計画において、初めてビエンナーレの建築が運河に向かって開き、街の環境と建築が結びつき、都市的機能の中に位置づけられた。ここでは例としてオーストリア、オランダ、フィンランド、ヴェネズエラのパビリオンを紹介するが、他にも下記に掲げるように多数の建築的示唆に富むパビリオンがある。リヒターのイスラエル館(1952年)、B. ジャコモッティのスイス館(1952年)、吉阪隆正の日本館(1956年)、ベルジョイオーソとペレッスーティ、ロジャースのカナダ館(1958年)、S. フェーエンのデンマーク北政館(1962年)、N. マルケジーニのブラジル館(1964年)などである。

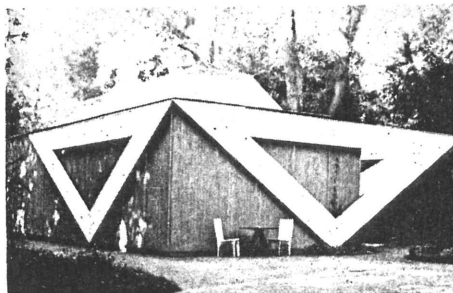
カルロ・スカルパの作品, 1948年-1968年 ビエンナーレにおいてカルロ・スカルパは1948年以来、個展(1948年のクレール展は忘れ難い)の会場構成や、旧イタリア



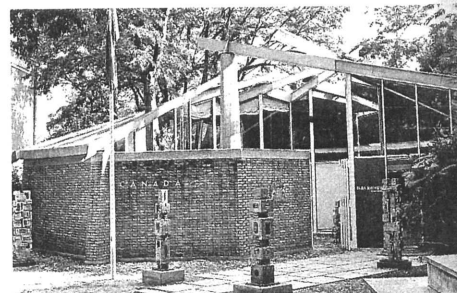
b) オーストリア館 J.ホフマン, 1934年



c) オランダ館 G.リートフェルト, 1954年



d) フィンランド館 A.アールト, 1956年



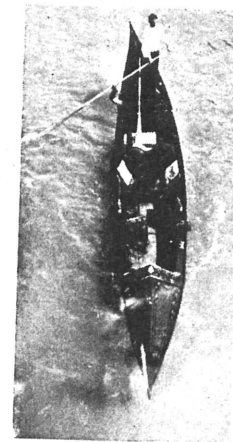
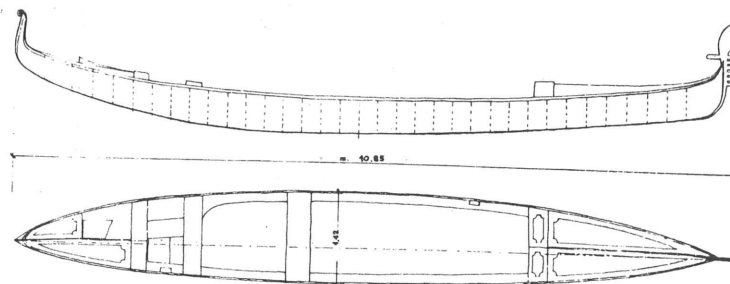
e) カナダ館 ベルジョイオーゾ, ベレステーティ, ロジャース, 1958年

ア館の必要に応じた改造のうちにほとんど協力していた。この改造の仕事は、入場券販売所と門(1952年)、内部の小さな中庭(1952年)、中央大広間(1958年)に残っている。カルロ・スカルパは独立したパビリオンを2つ建てている。本のパビリオンとヴェネズエラ館である。1950年に建てられた芸術の本のパビリオンは1984年に焼失した。1954年に建てられたヴェネズエラ館はスカルパの最も独創的で素晴らしい作品だったが、残念ながら1968年頃からメンテナンスが悪くなり、現在では空間の調和のとれたつながりは読み取れなくなっている。

オーストリア館, J.ホフマン, 1934年 1934年に建設されたこのパビリオンは、「セセッション」の指導者ヨゼフ・ホフマン(1870年-1956年)の晩年の作品のひとつで、この控え目な建造物の中にはまだ、ホフマンの典型的な高雅で上品な特徴が感じられる。全く異なるが対立していない3つの容貌が、この建物の中に存在する。すなわち上部のガラス窓と対照的に壁の表面に細かく皺をつけた「セセッション」の容貌、対称的なプラン、四角い入り口、洗練されたアトリウムとアーチにみられる古典風の容貌、簡素な平面プラン、全体のすっきりとしたヴォリューム、運河に面する長方形の形態の節度あるコントラスト、合理主義の容貌が見られる。

オランダ館, G.リートフェルト, 1954年 1954年に「デ・スタイル」運動の指導者ゲリット・トマス・リートフェルトによって建てられた。この作品にはコトレヒトの有名な別荘の新生の自由な様式はないが、16m×16mのプランに16m×8mのファサード、8mの全体の高さ、6mと2mの部分の高さなど、正方形に基づくシンプルなかちとした幾何学的なデザインになっている。幾何学的厳格さも、空間的にも外観的にもダイナミズムを与えている、高さの違う両翼をもつ「タービン状」に分節された平面構成で自由に崩されている。他より低い中央部分は間接的な明かり取りを可能にし、展示パビリオンにとっては大変機能的である。

フィンランド館, A.アールト, 1956年 アルヴァー・アールトによって設計され、フィンランドから直接パーツが運び込まれ1956年に建てられたプレハブのパビリオン。ただ一度のピエンナーレ用に考えられた組み立て式の木材の建物である。台形のプランで、垂直のパネルで形成された壁は、大きな逆三角形のトラスで補強されている。屋根と照明は創意に富む。ダブルスクリーンの天窓から壁伝いに光が入り、パビリオンの中央部分へは間接的に届く。「仮設の」建築とはいえ、その建築技術とディテールは(例えばドアの取っ手など)第一級の建築作品に数えられる。



101

ゴンドラ La Gondola

ヴェネツィアの都市景観からゴンドラのイメージを切り離すことはできない。事実、フォークロアの要素とか典型的なラグーナの舟というより、それはむしろ局限まで完璧に機能的で美的な作品になるよう、何世紀にも渡って常に磨かれ、建築的に完成した芸術作品といえる。「インダストリアル・デザイン」というより貝がらのような「自然が生んだ」産物といえる。機能的に見ると、ゴンドラはやはり同様に大変美しい「カオリーナ」や「サンドロ」のような他の典型的なラグーナの小船の特徴を全て兼ね備えている。軽さ、喫水が浅い、少ない水の抵抗、軽い操縦、その重量と大きさに比べて著しく大きい運搬能力、これらの特徴はこの街の地形と都市的必然に強く結びついている。ゴンドラは大変複合的な構造物で、ひとつの船体は7種類の木材の280のパーツか

らできている。通常は一人の漕ぎ手が一つの櫂であやつるようには作られている。平面的にも断面的にも非対称形をとり、櫂が横で押す力のバランスを取るために左側のカーブが右側より大きく、また漕ぎ手の体重とのバランスを考えて、右側に傾いて作られる。美的な観点から見ても伝統的にゴンドラの優美な形は賞賛されてきた。この形は建築的に賞賛されるべき多くの細部を示している。船首の「鉄の飾り」に加え、ここでは2つの部分に言及しよう。1つは「フォルコラ」、すなわちくみの木の櫂架で、彫刻のように作られている。もう1つは船尾の部分で、大胆に水面から持ち上がり、漕ぎ手の体重に耐えるために、まさに跳ね上がる構造になっている。その清廉なラインは、建築的見地からも、おそらくゴンドラの中で一番美しいものであろう。